

2.3. 言語学領域

本節では、言語学領域における活動をより具体的に報告する。

2.3.1. コンソーシアム科目

コンソーシアム科目とは、言語学・日本語教育学の分野で先端的研究を行っている世界の大学と締結したコンソーシアム協定に基づいて、協定校と共同で開講される大学院の研究科目である。それぞれの科目のテーマに応じて、協定校から教員と大学院生を招聘し、協定校と本学の教員が共同で講義を担当した。コンソーシアム科目は、前節に示したように7回開講され、内4回が言語学領域におけるものであった。

[台湾・国立清華大学との集中講義]

本事業最初のコンソーシアム科目は、2006年9月11日～14日に開講された台湾・国立清華大学との統語論研究に関するものであった。「演算子の移動と解釈」をテーマとして、清華大学から W.-T. Dylan Tsai 教授が、本学からは斎藤衛教授と鈴木達也教授が講義を担当した。Tsai 教授は中国語の *why* 疑問文、*how* 疑問文を取り上げ、非選択的束縛が認可に適用される環境と非選択的束縛に必要な



とされる *wh* 句の特質について講義した。斎藤教授は、*wh* 疑問文にまつわる日本語と中国語についての研究史を概観し、二言語の差異と共通点を詳細に講義した。そして、日中語それぞれの研究をふまえると、*wh* 句認可の方法において両言語間に相違があることになるが、そのような見解が反優位性効果 (anti-superiority effects) と反交差効果 (anti-crossing effects) という二つの現象に関して、どのような予測をするかという経験的問いを投げかけ、共同研究の可能性を提示した。鈴木教授の講義においては、英語の動名詞節がなぜ間接疑問文の環境に現れ得ないかという伝統的な問題が議論され、その答えの可能性として動名詞補文の分析が提案された。

清華・南山コンソーシアム (2006年度) 統語論研究					
時限	9/11	9/12	9/13	9/14	9/15
1	斎藤教授	Tsai 教授	鈴木教授	ディスカッション	ワークショップ
2					
3	鈴木教授	斎藤教授	Tsai 教授	ワークショップ	
4					
5		ディスカッション	ディスカッション		



集中講義には、清華大学院生 4 名が本学の大学院生とともに参加した。講義期間中、本学大学院生が清華大学教員の講義で扱われた中国語のデータを日本語のデータと比較し、また、清華大学院生が本学教員の講義で扱われた日本語のデータを中国語のデータと比較してディスカッションを行い、清華大学グループの滞在期間を有効に活用して共同研究テーマの絞り込みが行われた。この共同研究は継続して遂行され、後に、大学院生による 4 編の共著論文として結実する。特に、本学の瀧田健介氏と清華大学の Barry C.-Y. Yang 氏の共著論文 "Feature Valuation and Antisuperiority" は、後の 2007 年 12 月に香港で開催された第 6 回 Asian GLOW (アジア理論言語学会) で発表され、高い評価を受けることとなった (p.85 参照)。



[イタリア・シエナ大学およびアメリカ・コネチカット大学との集中講義]

第二回目のコンソーシアム科目は、「言語獲得研究と普遍文法」がテーマであった (2007 年 2 月 16 日～20 日)。イタリア・シエナ大学から Luigi Rizzi 教授、アメリカ・コネチカット大学から Diane Lillo-Martin 教授を迎え、本学からは村杉恵子教授が講義を行った。講義は、村杉教授のリードで幕をあげた。講義の内容は、日本語関係節と動詞の獲得研究を基礎として、文構造の獲得に関する一般的な議論にまで射程を広げたものであった。密接に関連する研究テーマを追究している Rizzi 教授のコメントに始まり、出席者全員が参加した活発な議論が持たれた。Rizzi 教授の講義では、村杉教授の講義を受けて、文左方周縁部の獲得に焦点が当てられた。特に不定詞が主文に生起する現象 (root infinitives)、文法的一致の獲得、wh 移動の獲得が取り上げられ、言語獲得の過程に関する具体的な提案がなされた。Lillo-Martin 教授の講義は、アメリカ手話における wh 移動の詳細な分析を提示した上で、それを言語獲得研究と言語理論の関わりという一般的な文脈に位置づけて議論するものであった。授業の中で、本学大学院生・富士千里氏が日本手話の特徴を紹介し、アメリカ手話との対照言語学的な検討がなされたことも付記したい。いずれの講義も、言語発達において、文法および文法以外の機構がどのように相互作用するか、また、母語獲得からのデータが文構造の解明にどのような光を当てうるかを示すものであった。集中講義は、コネチカット大学 William

Snyder 教授がリードする全体ディスカッションをもって終了した。

コネチカット・シエナ・南山コンソーシウム (2006 年度) 言語理論研究 B						
時 限	2/16	2/17	2/19	2/20	2/21	
1	導入	Rizzi 教授	Lillo-Martin 教授	ワーク ショップ	ワーク ショップ	
2	村杉 教授				ワーク ショップ	シンポ ジウム
3						
4						
5	ディスカッション	村杉 教授	ディスカッション			



なお、コンソーシウム科目に続いてワークショップおよび協定締結記念シンポジウムが開催されたため、シエナ大学、コネチカット大学、本学の教員と大学院生に加え、ハイデラバード国立言語研究所の K.A. Jayaseelan 教授と大学院生 2 名、ケンブリッジ大学の Ian Roberts 教授と大学院生 2 名、清華大学の W.-T. Dylan Tsai 教授と大学院生 2 名も集中講義に参加した。結果として、本集中講義は、言語獲得に関するその後の全協定校の共同研究を基礎付ける重要な役割を果たすこととなった。また、左方周縁部に関するイタリア語、日本語の比較統語論研究は、現在もシエナ大学と本学の大学院生が継続して遂行している。



[アメリカ・コネチカット大学との集中講義]

アメリカ・コネチカット大学の Željko Bošković 教授と Susanne Wurmbrand 教授を迎えて、2007 年 6 月 22 日～25 日に言語学領域第三回目のコンソーシウム科目が開講された。本学からの担当教員は斎藤衛教授と有元将剛教授、テーマは「極小理論の諸問題」であった。一日目は、まず斎藤衛本学教授が、導入として、それまでのコンソーシウム科目の成果を概観した。続いて、Wurmbrand 教授が、量化詞のスコープに関する講義を行い、ドイツ語や日本語のデータを検討しながら、いわゆる「スコープ固定」とかき混ぜ操作が引き起こす効果について、経済性に基づく説明を提示した。二日目には Bošković 教授の講義が行われた。前半は、統語的移動の動機付けについて論じ、後半は主に名詞句の構造、特に決定詞 (determiner) の有無と関連するさまざまな言語的特性を通言語的な視点から吟味した。二日目午後から三日目午前に渡っては、有元教授が、英語の上昇述語の特性を拡大投射原理との関連で論じ、また、



日本語分裂文における連結効果 (connectivity effects) のデータを紹介し、分析を検討した。その後、斎藤教授が VP 内かき混ぜと再構築 (reconstruction) についての講義と、削除現象における適正束縛条件 (Proper Binding Condition) の役割についての講義を行った。

コネチカット・南山コンソーシアム (2007 年度) 言語理論研究 A					
時限	6/22	6/23	6/24	6/25	6/26
1	斎藤教授	Bošković 教授	ワークショップ	有元教授	ワークショップ
2	Wurmbrand 教授			斎藤教授	
3		有元教授			
4					
5	ディスカッション	ディスカッション		ディスカッション	

様々な現象や理論的課題の関係を明らかにし、個々の大学院生の取り組んでいるテーマが相互に密接に関連していることを示したことが、この集中講義の特徴であったといえよう。この後、集中講義に参加した大学院生は、意見交換をしながら、専門誌投稿論文や学位論文を含む多くの論文を完成させていくこととなるが、近い将来に、より大規模な共同研究プロジェクトの中で、その成果を統合していくことになろう。



[イギリス・ケンブリッジ大学およびインド・ハイデラバード国立言語研究所との集中講義]

イギリス・ケンブリッジ大学およびインド・ハイデラバード国立言語研究所とのコンソーシアム集中講義は、前年度2月のコネチカット大学、シエナ大学とのコンソーシアム科目と同様、本学を含む三校が関わる科目であった。両校から教員・大学院生計5名を招き、「項構造と機能範疇」をテーマにして、2007年9月17日～19日の三日間の日程で開講された。まず、ハイデラバード国立言語研究所の K.A. Jayaseelan 教授が講義を行った。最初に、与格構文の項構造を取り上げ、特にマラヤラム語と与格構文と英語与格構文を比較して、両者の述語の統語範疇の違いを導き出す試みについて講義し、後半は、ドラヴィダ語、インドアーリア語の所有者構文、経験者構文の基底構造について、格の観点から独創的な提案を披露した。コンソーシアム第一日目後半と第二日目前半は、青柳宏本学教授が担当し、二つのトピックを取り上げた。最初の講義では、韓国語の使役文と受動文の統一的分析が提案され、翌日の講義では、日本語の受動文にまつわるさまざまな問題点に触れ、特に日本語受動文を二つの

異なる構文として捉える見方を批判的に検討した。青柳教授の使役文についての講義はロマンス語のデータにも言及しており、3人目の講師であるケンブリッジ大学 Ian Roberts 教授のロマンス語使役文の講義に引き継がれた。Roberts 教授はスマグリング (smuggling) 操作に基づいた使役構文の分析を提案し、言語獲得研究への応用の可能性も示唆した。



三教授の講義が終了したのち、最終日には青柳教授を中心に、全体ディスカッションが持たれた。日本語のデータに基づいて Jayaseelan 教授の提案を発展させる可能性、ならびに Roberts 教授のスマグリング・アプローチを日本語受動文に適用する可能性が、議論の中心となり、共同研究の方向性が明らかになっていった。後者は、大学院生の修士論文として結実し、前者について、現在も共同研究が継続して行われている。

ケンブリッジ・ハイデラバード・南山コンソーシアム (2007 年度) 統語論研究				
時限	9/17	9/18	9/19	9/20
1	Jayaseelan 教授	青柳教授	デ ^o イスカッション	ワークショップ ^o
2		Roberts 教授		ワークショップ ^o
3			デ ^o イスカッション	
4	青柳教授	デ ^o イスカッション		
5				

2.3.2. 特別セミナー

[イタリア・シエナ大学および台湾・国立清華大学との特別セミナー]

1月31日から2月1日の二日間にわたって、イタリア・シエナ大学、台湾・国立清華大学からの参加者とともに特別セミナーが開催された。セミナーは、シエナ大学 Adriana Belletti 教授のビデオ講義、阿部泰明本学教授の2つの講義、および清華大学院生 Xin-Xian Rex Yu 氏とシエナ大学院生 Giulia Bianchi 氏の発表で構成された。(Belletti 教授のビデオ講義は、予定されていた来日をやむを得ない事情により中止せざるを得なかったことを受けて、同教授からの提案で実現したものである。シエナ大学院生 Cristiano Chesi 氏がビデオの作成に尽力した。) Belletti 教授の講義は「疑問文に対する答えのストラテジー：新情報主語と分裂文の性質 (Answering Strategies: New Information Subjects and the Nature of the Clefts)」と題され、

疑問文の答えに分裂文を用いるか否かという点における言語間差異の観察を出発点として、新情報焦点要素の統語的位置づけを検討するものであった。より具体的には、新情報焦点要素がコピュラを主要部とする動詞句左端を占めるとする議論が、イタリア語、フランス語、日本語を含むさまざまな言語のデータに基づいて展開された。阿部教授は、特別セミナーの一日目後半と二日目前半にわたり、日本語の音形に現れない目的語の解釈について講義（「日本語の空代名詞 (Empty Pronouns in Japanese)」）を行った。まず、1960年代以降の当該トピックの研究史をまとめた後、主節主語からの埋め込み文空主語と空目的語への束縛には非対称性が存在するという一般化を支持するデータ群を提示し、最後に主題役割に基づいた分析を検討した。



特別セミナーの二日目後半は、清華大学院生 Yu 氏が "Two Types of Adverbials in Mayrinax Atayal" と題して、台湾現地語でオーストロネシア系言語に属するタイヤル語の副詞表現について、シエナ大学院生 Bianchi 氏が "Use, (Mis-)Placement and Drop of Object Pronouns in German as L2" と題して、イタリア語を母語とするドイツ語学習者の目的語代名詞の獲得について、それぞれ口頭発表を行ない、その後、両氏の発表および Belletti 教授、阿部教授の講義に関する約 1 時間のディスカッションをもった。このディスカッションで話し合われた Belletti 教授への質問は同日、本学村杉恵子教授と大学院生・瀧田健介氏によって E メールで Belletti 教授に送られた。翌日 Belletti 教授から質問に対する回答が届き、ワークショップのディスカッションの時間に再び議論をすることになった。

本特別セミナーでは、焦点化、空代名詞というイタリア語と日本語に共通する主要研究テーマについて、シエナと本学の大学院生が理解を深めることができ、来年度以降のさらなる共同研究のための基礎を固めることができた。

シエナ・清華・南山特別セミナー (2007 年度)					
時間	1/31	2/1	2/2	2/3	2/4
10:00~	Belletti 教授 (特別講義)	阿部教授 (特別講義)		ワーク ショップ	ディスカッション
12:00~					
14:00~	ディスカッション	Yu 氏、 Bianchi 氏 (研究発表)	ワーク ショップ		
16:00~	阿部教授 (特別講義)				